

Fumiaki Akahane



Imak

Lands



The y

20

Genki Isayama



—— 〇二四年一〇月、アーティストの赤羽史亮さん、諫山元貴さん、黒田大スケさん、グラフィックデザイナーの牧寿次郎さんを愛媛県今治市に招待し、三泊四日の旅をしました。Imabari Landscapesが二〇一八年より愛媛県今治市で運営しているアートプロジェクトのひとりで、「Imabari Landscapes They Saw」Vol.4にあたります。その一部をまとめたのが、本ドキュメントです。

Imabari Landscapesは「身近にアートがある暮らし」をコンセプトに、地域に住まう一人一人が、多様で、自分らしい生き方を選択できる土壌の醸成を目指しています。活動の二本柱は、ゲストと今治を旅する「Imabari Landscapes They Saw」と今治を旅する「Imabari Landscapes They Saw」Vol.1とVol.2、Vol.3を実施しました。

もうひとつの「ART SANPO」は二〇二一年にスタートしました。新型コロナウイルス感染症の拡大によって人の移動が難しくなり、それまでのように街に人を招き入れる企画を実行することが難しくなりました。そこで、人の代わりにアート作品が今治市内の店舗を回遊する展覧会ART SANPOを始めました。赤羽さんはART SANPO 2023の参加作家で、牧寿次郎さんにはART SANPOのチラシを三度デザインしていただきました。

Vol.4の今回は、二年に一度、本プロジェクトを実施することがルーティンワークになってきているので、これまでのImabari Landscapesの企画に関わってくれていた赤羽さんと牧さんにお声がけするところから始めました。その後、ART SANPOという展覧会形式では紹介するのが難しい映像作家の諫山さん、黒田さんを招待しました。

これまで三回プロジェクトを実施してきて気がついたことは、参加者同士が今治で初めて対面すると、三泊四日の旅を通じてより面白い化学反応が起こる、ということでした。その経験をもとにゲスト同士のマッチングを図りました。黒田さんが交通機関のアクシデントで途中参加になってしまいました。様々なアクティビティを通じてお互いの関係性を深めながら、和気藹々とした雰囲気醸成され、その雰囲気トークイベント会場から最後の打ち上げにまで繋がったように感じます。

プロジェクトを始めてはや七年。初めは右も左も分からないまま、アートプロジェクトを立ち上げましたが、少しずつ自分が提案したいアートとの関わり方の輪郭が浮かび上がってきているように感じます。それに伴い、心強い仲間も増えてきました。なんでもある都会とは異なり、「ないなら作ろう」精神を養うことが地方に生活する醍醐味だと改めて感じます。小さな点かもしれませんが、幾つもの点がいつか線になり、さらには大きな面に広がることを期待しつつ、これからも継続的に、身近にアートがある暮らしを提案し続けたいです。

# はじめに・目次

はじめに・目次  
今治旅を振り返る

1

今治日記

4

先に人

16

今治滞在記

22

今治の風景

32

トークイベントを振り返る

40

アーティストプロフィール

44

Imabari Landscapes vol.4

48

Imabari Landscapes デイレクター  
周山祐未



# 愛

媛県今治市は、瀬戸内海に面した愛媛県第二の都市で、繊維産業や造船業が盛んな街です。広島県尾道市と今治市を結ぶ全長約六〇kmの「瀬戸内しまなみ海道」は、近年サイクリストの聖地として知られ、海外からの訪問客も増えてきています。

今回、彼らを招待するにあたり、瀬戸内海の穏やかな海やそこに浮かぶ島々とともに巡り、海事都市として発展した街の歴史を紹介したいと思いましたが、そこで、しまなみ海道でサイクリングをして、隈研吾氏による設計として知られるパノラマ展望台が魅力の亀老山展望公園や、日露戦争当時、ロシア艦隊の来襲に備えて造られた芸予要塞を訪れました。あわせて、地元の産業である造船所やタオル工場の見学、今治市内に点在する丹下健三建築ツアーを行いました。夜は、地元の獲れたての魚、鉄板で焼き上げること有名な今治焼き鳥が食べられるお店で今治に住む方々との交流を深めました。



# 今治旅を振り返る

十月四日(金)

10時

赤羽・牧到着@松山空港

11時15分

諫山合流@サンライズ系山

11時半〜12時半

昼食@伊豫水軍

13時〜14時半

タオル工場見学@株式会社丹後

15時半

しまなみ海道サイクリング

17時

亀老山

19時

夕食@鳥林

21時

二次会@ジャグ

十月五日(土)

8時

フェリー 造船所見学

11時〜13時

耕三寺見学

13時半〜14時半

昼食@万作

15時

黒田合流@大三島

15時〜16時

ところミュージアム見学

17時〜18時

丹下建築めぐり

19時

夕食@頼登

十月六日(日)

8時

朝食@珈琲道場

10時

フェリー 芸予要塞見学

13時

昼食@かねと食堂

14時〜15時

作戦会議@Amo、トーク準備

16時半〜18時半

トーク@今治ホホ木座

19時

夕食@焼鳥パーク

十月七日(月)

8時半

朝食@アメリカ

11時

諫山・黒田・牧出発@今治駅

15時

赤羽出発@松山空港

四人のアーティストは、二七枚撮りのレンズ付きフィルム「写ルンです」を片手に三泊四日の旅をしました。彼らの目に、今治はどのように映ったのでしょうか。彼らが撮影した写真とともに、旅の感想を紹介します。



僕

僕は四国に行ったことがなかったけれど、四国の愛媛県今治市に行くことになった。周山さんが僕をImabari Landscapes They Sawと呼んでくれたからだ。Imabari Landscapes They Sawがどういうものかというのはこの冊子の別のところに詳しく書いてあると思うから言及しないけれど、Imabari Landscapesが一体なんなのかはおそらく周山さんも本当はわかっていない。それは周山さんが作ったものだけど、僕は作った本人の意図を超えていくようなバイブスを感じて、面白いと思ったから、周山さんから、作品が今治市内の店舗を巡回するART SAMPO 2023の誘いがあったときも「是非!」と即答した。今回ももちろん「是非!」と即答した。

今回一緒に旅する三人のうち、牧くん以外は会ったことが無い人達だった。でも、初めて会ったのに初めて会った気がしない人が世の中にはいるけれど、諫山くんも黒田さんもそういう人だった。周山さんも初めて会ったときそう思った。牧くんは大学の違う学科の同級生だ。大学時代話したことはなかったけど、キャンパスや授業で見かけていて顔は覚えていた。卒業後は僕が参加したグループ展のチラシを牧くんがデザインしていたりで何回か会ったことがある、けれども、あんまり話したことは無い、というような感じだった。

一〇月三日（前日）

朝八時、成田発の飛行機だったので成田のドミトリに前泊した。ドミトリの玄関に煙草を吸いに行ったらオーストリア人の若い男の子がいて挨拶した。しばらくして、また煙草を吸いに行った

[illegible]

ら、またさっきのオーストリア人の男の子がいて仲良くなった。僕が「I'm a painter」（僕は画家だ）」と言いつと男の子は「I'm a fire bartender」（僕はファイヤーバーテンダーだ）」と言った。写真を見せてもらったら口から火を吹くパフォーマーだった。火吹き男だ。

一〇月四日（一日目）

朝、長野からお土産を買ってくる約束をしていたのを完全に忘れていたことに気がついた。代わりに成田空港でクッキーを購入した。

松山空港に着いて、出口で牧ちゃんと合流、周山さんが車で迎えにきてくれて、そのまま宿泊先のサンライズ糸山へ行き、諫山ちゃんと合流した。黒田さんは悪天候で飛行機が欠航したため二日目から合流することになった。

まず、美味しい鯛めしのお店に周山さんが連れて行ってくれた。海の見えるお座敷で鯛めしとお刺身を食べた。鯛めしを僕は生まれて初めて食べてとても美味しかった。周山さんが僕のお腹を見て「わがままボデイ！」と言った。もう少し痩せないとなーと思った。

いとなーと思った。

[illegible]

タオル工場を引き継ぐことになった、人生は予想できない、これからも予想できないことが起こると思うけれどそれで良い、と言っていた。

そのあと、しまなみ海道をサイクリングすることになった。自転車で来島海峡大橋を大島に向かって走っていると、大島の海岸が見えて、それが僕が一番好きな映画『青春デンデケデケデケ』に出てきそうな風景で興奮した。橋の下の海はいろんなところで渦を巻いており、今でも船がときどき座礁する航海の難所なんだそうだ。

当初、大島には自転車では上陸せずに一旦引き返して皆で車で行く予定だったけれど、僕と牧くんの二人は大島にある亀老山の山頂まで自転車で見指すことにした。「行くつしよ！」というノリになつたからだ。自転車で走りながら僕の絵や僕のやっている障がい者ヘルパーの仕事の話や、牧くんのデザインの仕事の話をした。牧くんの心の奥にグググと熱いモノがあることがわかった。でも、それは元々知っていた。改めて確認した、つて感じだった。

僕と牧くんは頑張ったけれど、山道は想像以上に過酷で途中で僕の足が限界になって、山頂まで残り2kmのところまで周山さんの車に拾ってもらった。

山頂に着いて綺麗な景色を見た。

スマホで綺麗な景色を撮ると、すぐに写真を見て、全然違うので残念な気持ちになるけど、「写ルンです」で撮るとワクワクするということがわかった。

移動の車の中で牧くんが佐塚のモノマネをしたら  
凄く上手だった。





# 今治日記

一〇月五日(二日目)

そのあと、焼き鳥のお店「鳥林」に周山さんが連れていってくれた。今治焼き鳥(焼き鳥が串に刺さっていない)はとっても美味しかった。活気のあるお店で、僕は普段長野で飲み屋にはほぼ行かないから、こういう飲み屋に飢えていた。嬉しかった。周山さんは運転があるから飲めないし、牧くと周山くんはお酒を普段から飲まないの、僕だけお酒を頼んだ。僕はビールを中ジョッキ二杯飲んだ。

そのあと「ジャグ」というジャズが流れるログハウス風の喫茶店に連れていってもらった。

僕はザクロミルを注文した。飲んだことのないものを飲みたかったからだ。みんなアイスココアやらアイスコーヒーやら、めいめい違う飲み物をたのんだら、ちょっと怖そうなマスターが「全員違うものたのみやがって」と笑っていた。今治のお店の人是最初ちょっと高圧的で、でも実は優しい人が多い。長野のお店の人たちは高圧的な人はあんまりいない。港が近いからかなあ、となんとなく思った。僕はジャズもログハウスも煙草が吸える喫茶店も大好きなので嬉しかった。諫山くんも喫煙者なので嬉しそうだった。諫山くんは新宿にある全席喫煙可の喫茶店「ピース」を教えてあげた。

夜、ホテルに戻った。この旅では諫山くんとずっと相部屋だ。部屋で諫山くんと家族のことなど、いろいろ話した。諫山くんは広島在住でトシさん※2と仲良しだとわかった。トシさんと釣りに行ってまた飲みたいと思った。寝た。



朝起きてホテルのロビーで前日コンビニで買ったおいたボークおにぎりを食べたり、喫煙所でたばこを吸っていたら周山さんが迎えに来てくれた。移動の車中でラジオ番組の「荻上チキ・Session」の話や、俳優の小栗旬の話や佐塚の話をした。まずは造船所見学に行った。周山さんの夫のあきさんが案内してくれた。船がとにかく大きくて圧倒された。僕は頑張って大きい絵を描いているつもりでいたけれど、この船に比べたら小さいな、と思った。造船所は凄く広かった。僕はノイズミュージックが好きだからインダストリアルな雰囲気最高だった。興奮して勝手に行動していたら、周山さんに少し怒られた。

船の材料の鉄の板は二〇mmから八〇mmの厚さがあるけれど、何十mもの巨大な板になると、たわんで、巨大な折り紙のようになるそう。船はその巨大な鉄の板を何層にも重ねたり、組み合わせたりにして造る。溶接工の人達はその層の中に入り込んで作業するそうで、船が完成に近づいていくとみんな鉄の層の内部に入って作業するようになるので、外からは人影が消える、という話を聞いた。蜂の巣や蟻の巣みたいだ、と思った。喫煙所で外国人労働者の人がタバコを吸っていた。僕は外国人労働者の人もタバコを吸っている人も好きだ。挨拶したら笑顔で返してくれた。造船所の人達はゴミ箱でも、休憩所の屋根でも、なんでも鉄を溶接して作ってしまう、なので全部重い、という話を聞いた。それはとっても良いことに思えた。船尾に付いているプロペラが金色でピカピカしていて



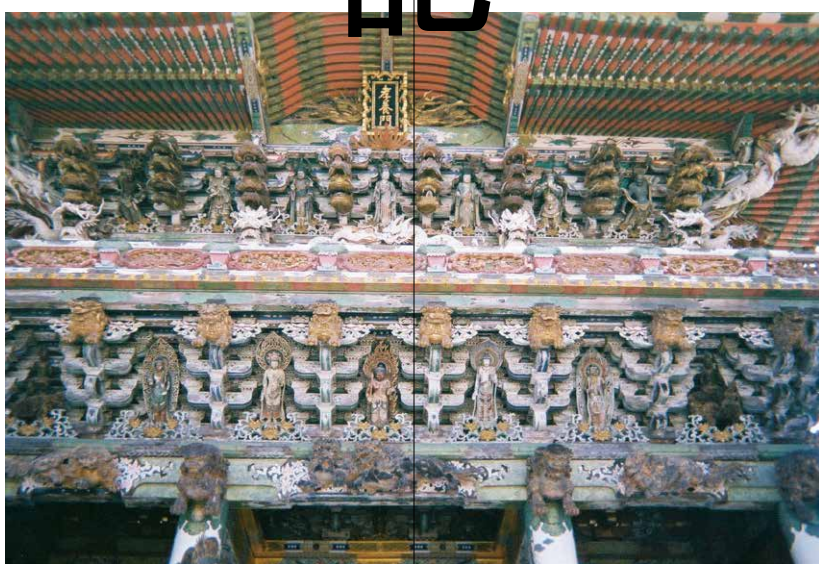
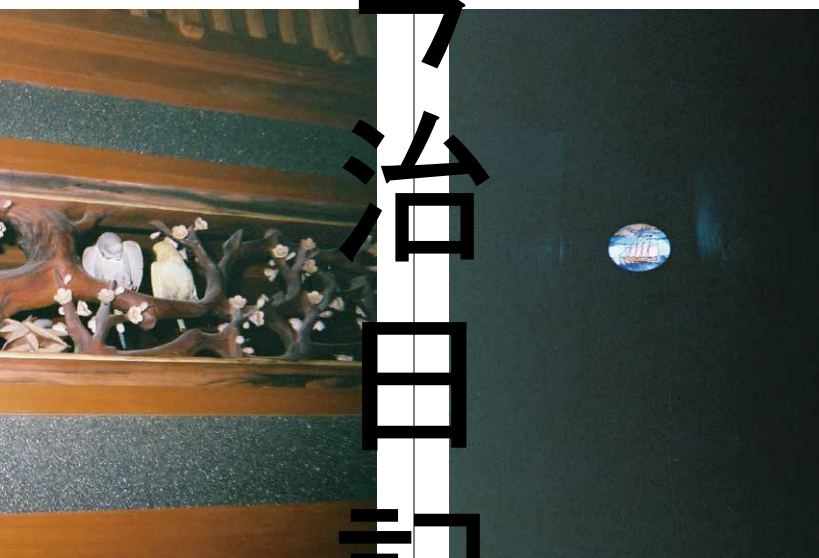
カッコよかった。もらったパンフレットに丸い地球とそれをバスケットボールを持つように包み込む手のイメージの写真が大きく載っていて、とても暴力的なイメージだと思った。

そのあと耕三寺というお寺に連れて行ってもらった。耕三寺くん、というとても若い副住職さんに案内してもらった。耕三寺くんのメガネは光が当たるとレンズが黒くなってサングラスになるという優れもので、「あ、今サングラスになってる」（屋外に出たからだ）、「だんだん、黒が薄くなってきてる」 「あ、メガネに戻った」（屋内に入ってからだ）と思いながら案内を聞いた。耕三寺は浄土真宗のお寺で、僕は親鸞にずっと興味があったので親近感を持った。お寺の中にはいろんな有名なお寺を模した建造物が沢山あって、仏教のアマミューズメントプレイスだ、と思った。中でも千佛洞地獄峡という洞穴に僕は興奮した。僕は昔から穴や地獄が好きだ。洞穴や鍾乳洞にいつも心惹かれている。千佛洞地獄峡の中にはいろんな地獄を説明する絵や沢山の石仏があった。「写ルンです」で写真を撮る沢山撮った。



千佛洞地獄峡を出たあと、耕三寺の中にある「未来心の丘」という大理石でできた山に登った。ここには杭谷一東さんという彫刻家の大理石の彫刻が沢山あった。彫刻も大理石だけれど、地面も全部大理石だった。スキー場がまぶしいのと同じ原理で大理石の山はまぶしかった。耕三寺くんの眼鏡は完全にサングラスになっていた。そのあと耕三寺の隣にある耕三寺博物館でお茶の道具や秀吉の手紙などを見て、お寺の近くのお店で、タコ飯をご馳走になった。僕はタコ飯を生まれて初めて食べたけれど美味しかった。

耕三寺を出てしばらく車で移動して黒田さんと合流した。車がばんばんになった。やっと全員そろったとみんな嬉しそうだった。黒田さんが「写ルンです」で車中の写真を撮った。他の人は諫山くんのことを「諫山くん」と呼ぶけど、黒田さんと諫山くんは一〇年来の付き合いで、諫山くんの方が年下なので、黒田さんだけは「イサヤマ！」と呼んでいて、良いなあと思った。僕は今回「諫山」という苗字に人生で初めて触れたので、心の中で「イサヤマ」



# 今治日記

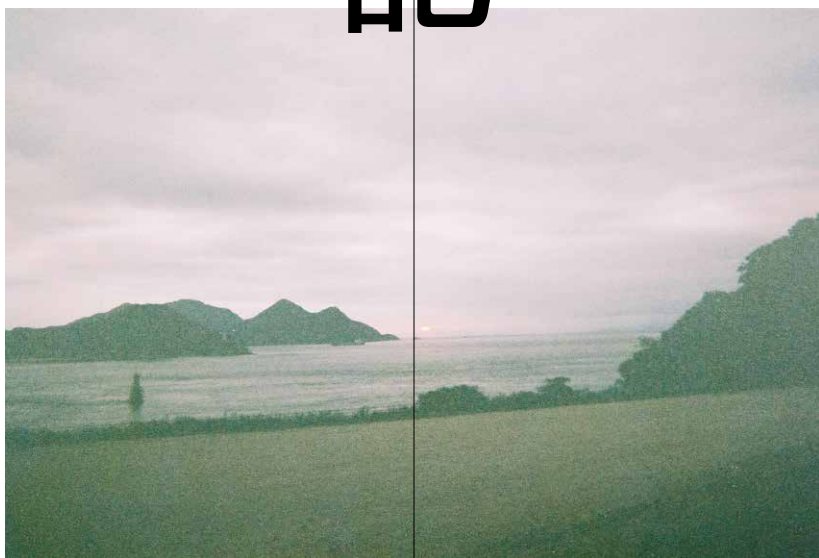




なのか「イソヤマ」なのかわからなくなったり、「イ」しか思い出せなかったりしていた。そのあと、「ところミュージアム」という美術館に連れていってもらった。僕は太竹伸朗が好きなので昔見た太竹伸朗の図録の展示歴のところに「ギャラリーところ」という文字があったのを覚えていたので「ところミュージアム」と関係があるかもしれないと思ったけれど、それはよくわからなかった。そのあと、建築家の長井信彦さんに今治市内に点在するに丹下健三の建築を案内してもらった。僕は建築に詳しくないので、ウルトラマンやウルトラセブンに出てくる建物みたいだと思っていた。「ここで展覧会したいね」などと周山さんと話した。建築を巡る道中、黒田さんは街中にあるブロンズ彫刻に詳しくて、「この人は日展の審査員をした人で……」とか凄く詳しく説明してくれた。諫山くんが「ちょっとそこまではわからないっす……」と言っていた。その他にも黒田さんは防空壕のあった場所が地図からわかると言って



# 今治日記



いた。凄い。商店街を歩いていたら、お祭りをやっていた。とっても立派な商店街だけど、普段は人がいない、と周山さんが嘆いていた。お祭りだからか、お店の看板がズラっと光っていたけれど、ほとんどのお店がすでに閉店してしまっている、とのことだった。僕の住んでいる長野もそうだけど、人が少なくなっている。子供が少ない。僕のじいちゃんやんは八人兄弟だったけど、僕は三人兄弟で、僕の子供は一人しかない。昔の方がみんな貧乏だったというけれど、昔の方が子供を沢山作っている。僕の妻のさくらが去年カンボジアに旅行で行ったときホテルの従業員や街の人たちに若い人が多くて驚いた、と言っていたのを思い出した。夕ご飯はお刺身の美味しいお店に行った。僕と諫山くんと牧くんが先に着いて、あきさんが来て、少し遅れて周山さんと黒田さんと長井さんが来た。お刺身のマグロが凄く美味しかった。でも今治で捕れたものではないらかった。途中、長井さんがひとりですっと喋っていたので周山さんが怒った。長井さんは笑顔で帰っていった。あきさんが、



マツダの車のフォルムは船のフォルムに近い、と言っていて、本当に船が好きなんだなあ、と思った。僕はビール中ジョッキ一杯とハイボール一杯を飲んだ。

宿に戻って風呂に入り、諫山くんといろいろギャラリイのことなど話して寝た。

一〇月六日(三日目)

朝早起きしてひとりで近くの海に釣りに行った。ちょうど朝日が昇るところが見れた。海から出てくる時に太陽がオレンジ色になっていた。普段使っている溪流用スプーンを投げたけど何も反応は無かった。周りに何人か釣り人はいたけど誰も釣れて無さそうだった。一個スプーンを岩に挟んで無くしてホテルに戻った。僕は今まで、フランスと沖縄と今治の計三回、海で釣りをしたけれど、フランスでシーバスが一匹釣れた他はボウズだ。フランスに戻って、みんなで珈琲道場という喫茶店に行った。モーニングでポテトサラダサンドを食べた。

そのあと波止浜港から小さなフェリーに乗って、小島という小さい島にある芸予要塞という日露戦争に備えて作られた要塞の跡地を見に行った。港で周山さんがフェリーのチケットを買っているのを皆で話しながら待っていると、突然おじいさんが会話に参加してきた。その人は周山さんがツアーガイドを頼んでいた八四歳の葛西さんというガイドさんで、ニコニコ笑顔で今治の歴史の話をしてくれた。フェリーが到着して皆で乗り込んだ。釣り竿を持った人たちも何人か乗り込んでできた。何が釣れるのか聞いたけれど今はもう覚えて

# 今治日記

いない。僕たちはフェリーの座席に座って外の景色を見たりしていたけれど、葛西さんはずっと立っていた。フェリーが小島に到着して、葛西さんから島の歴史を説明してもらった。葛西さんは少し耳が遠かったので、牧くんや諫山くんが質問しても声が小さいと、スルーしてそのまま話を進めた。芸予要塞は島の上の方にあるので、坂道を上って行くことになった。みんながハーハー言いながら坂道を登る中、葛西さんは全然平気そうに竹の棒をブンブン振りながら(蜘蛛の巣を払うため)スタスタ登って行った。健脚だった。この島にはイノシシがいるらしく、地面を掘り返した跡が道沿いはずーっと続いていた。黒田さんがイノシシの通ったところにはマダニがいるかも知れないから気をつけて、と教えてくれた。

江戸時代にこの島に移住してきた人達は楽しかったんだろうな、と思った。自分で考えて家や道を作ったり。大変だっただろうけど。

しばらく坂道を歩いていくと、日露戦争のころに作られた砲台や火薬庫の跡地があった。レンガ造りの建物はかなり保存状態が良く、綺麗だった。「ここで展覧会したいね」などと周山さんと話した。歩いている道中、僕は水木しげるの漫画が好きだから、生えている笹や草木が、水木しげるの戦記マンガに出てくるように鬱蒼と茂っていたので興奮した。僕は戦争には参加したくない。ここで働いていた兵隊たちは嫌だっただろうな、と思った。自分で考えて家や道を切り拓いたり、休憩所の屋根を作るために鉄を曲げるのは楽しいけれど、誰かに命令されてレンガを運ぶのは嫌なことだ。ファックだ。案内をしてくれた八四歳の葛西

さんは楽しそうに山を登っていたので、ガイドの仕事はファックではない、と思った。

帰り道に葛西さんに、小さい頃、車が無かった時は移動はどうしてたのか、聞いたら「徒歩!」と言っていた。またフェリーに乗って今治市街のほうに戻った。

移動の車中で志水児王さんの話になった。志水さんは僕が浪人生の時、長野県松本市にあるマツモトアートセンターという予備校で教わっていた先生で、僕が人生で初めて出会った現代美術のアーティストだ。今は広島にいて黒田さんも諫山くんも知り合いだった。二人とも志水さんは声が小さいと言っていた。僕は志水さんに二〇年くらい会っていない。

お昼の定食屋では周山さんはオムライスを頼んだけれど、僕はカツカレー大盛、諫山くんはカツカレー、牧くんはカツ丼、黒田さんはカツ丼大盛を頼んだ。みんなカツだ。トークイベントに向けて気合いが入っている。周山さんが「私もカツ食べない!」と「ちようだい!」と僕のカツカレーのカツを一切れパクツと食べた。

トークイベントまで時間があったので喫茶アポニーでみんなでダラダラした。晴れていてポカポカしていたので、黒田さんが眠たそうな顔で「眠いですね!」と言っていて、僕もウトウトした。トークイベントに向けて程よい緊張感があった。

トークイベントは、今治ホホ木座という普段は音楽をメインにやっている多目的スペースで行われた。会場準備をしている今治ホホ木座の壁に「ASA-CHANG&巡礼」のサインがあったので、「ASA-CHANG&巡礼だ!」と言った今治ホホ木座の





吾一さんが「ASA-CHANG&巡礼、最高ですよね！」と応えてくれた。ASA-CHANG&巡礼のASA-CHANGは大学時代一緒にバンドをやっていた菊ちゃん(菊川恵里佳)がドラムを習っていたので親近感がある。近くのライブハウスに椅子を借りに行く車中で吾一さんと「OGRE YOU ASSHOLE」やジム・オルークの話をした。

コンビニに飲み物を買に行った時、周山さんが初日の僕は臭かったけど二日目からは大丈夫だったと教えてくれた。四年前、「CAVE+YUMI GALLERY」の鈴木歩さんと画家の中村太一さんとバルセロナに行ったとき、宿でウンコの匂いがして、バルセロナはよく犬の糞が落ちていたからみんなの靴の裏を見たけれど誰もウンコを踏んでいなくて、結局僕の足の臭いがウンコの匂いだった時のことを思い出した。

トークイベントでは僕が予定時間より喋りすぎたりしたけれど、順調だった。トークイベントの最後にお客さんから「今後の目標は？」と聞かれて「海外で発表したいです！」と答えたら周山さんがこつちを見てグツと親指を立てた。トークが終わったあと、お客さん達の顔を見てこのイベントは成功したんだと確信した。みんないい顔してたからだ。嬉しかった。

打ち上げで多くの人と話した。みんな心の奥の方にグググと熱いモノがあるのがわかった。それが打ち上げのエンジンになって打ち上げは大いに盛り上がった。

途中、尾竹<sup>※3</sup>から電話があった。出ると、体調が悪いとのこと、妻のさくらもそうだけれど、パレスチナ<sup>※4</sup>のことがきっかけで体調を崩している人が

うどんを食べて、まだ時間があつたので喫茶店でコーヒーとモンブランを食べて、飛行機に乗って帰った。(赤羽)



身近に多い。

会場に戻ったら周山さんが「席替えするよろ！」と言って、席替えをした。大分から来た安藤くん<sup>※1</sup>とアナキズムの本の話をした。僕はビール中ジョッキ一杯とハイボール三杯を飲んだ。僕たちはホテルの門限があるので二次会には参加せず帰った。

ホテルに戻ってお風呂に行くと諫山くんと黒田さんが先に入っていて話をしていた、僕も加わって話して、しばらくして諫山くんが先に出ると、牧くんが入ってきてまた三人で話した。部屋に戻ってまた諫山くんと話した。クロン羊の話や、デヴィッド・グレーバーの話、加藤<sup>※4</sup>さんの話などをした。相部屋の諫山くんと僕は旅のメンバーの中で二人だけ喫煙者だったので、いろんなところで一緒に煙草を吸った。展覧会がゴールだったらみんなとこんなに仲良くならなかったらうな、と思った。寝た。

一〇月七日(四日目・最終日)

今日は最終日だ。朝起きてみんなでモーニングを食べに行った。僕はカレーを食べた。

そのあと、今治駅に行った。黒田さんと牧くんは電車、諫山くんは車、僕は飛行機なので、ここでお別れだ。牧くんが「この旅でほんとの同級生になったって感じだね」と言った。最後にみんなで握手をして別れた。けっこう寂しかった。せっかく仲良くなったのに、という気持ちだった。

飛行機の時間までまだ時間があつたので、周山さんは僕を道後温泉まで連れて行ってくれた。僕だけ温泉に入って、そのあと周山さんと大黒

# 今治日記



※1 美術家の佐塚真啓のこと。国立奥多摩美術館の館長でもある。

※2 画家の小西紀行さんのこと。

※3 友人でアーティストの尾竹隆一郎のこと。

※4 画家の加藤泉さんのこと。



**最** 初にお断りしておくが、私は文章を書くのが苦手なため、以下は私が話したことを文字起こしたものをベースに編集したものである。

私は「Imbari Landscapes They Saw」（以下、頭文字を取ってILTSとする）が、ある種のアーティスト・イン・レジデンス（以下、レジデンス）という認識で参加した。しかし、これまで参加したレジデンスとは違っていた。私が参加したレジデンスの数は少ないが、それらはその土地に数週間ほど滞在し、その土地で地元の人に会うことは希望すれば任意であったし、自分で（またはそのレジデンスのコーディネーターや運営の方と一緒に）その土地を散策し、最後はその経験やリサーチを通して、展示というかたちで作品を発表するものであったと思う。

一方でILTSは、ほぼ初対面の四人が周山さんに今治の各場所を案内してもらって、共に行動し、最終日にはお客さんの前で周山さんがファシリテーターを務め、四人の自己紹介的なトークに加え、各々のアートに対する見解等を発表、その後居酒屋にて今治の方々と懇親会をする形式のものであった。ちょっと話は飛ぶが、ほぼ初対面の四人が共に行動することも相まってか、大人になつてから仲良くなる人ができるのは面白い体験だった。初日のILTSでは恒例（？）のサイクリングがあった。運動不足の身体にムチを打ちながら、しかし心地よい風を感じながら、足がぱんぱんになる。全身で瀬戸内海を感じた。

話を戻すが、レジデンスプログラムにおいて私が考える作家像があるとしたら、それはその場所に作品で何らかのアクションをおこす人だと思う。が、ILTSは、作品ではなく、お客さん（未来の観賞者？）が、先に人（アーティスト、デザイナー）と出会うことを目的としている珍しいかたちのレジデンスプログラムだったんじゃないかと思う。ILTSに参加するなかで、今治の土地にとって（周山さんにとって）これは一体何なのか、何のためのILTSかを考えてみたいと思った。

それは、これから仮に今治で制作や作品を展示するとした場合の前座戦だったように思う。

その四人はまず、自分（いうなればアーティストやデザイナーのキャリアとか）を消して今治を体験、大人の社会科見学をし、周山さんの今治での知り合いに（今回は広島県の生口島にある耕三寺の副住職にも）会って交流を深める。トークは作家のこれまでの経歴や作品を紹介するものであったが、話すときの作家の振る舞いを含めて、誰がどのような話をするのかをお客さんが聞くことで、今治の人が実際の作家に先ず出会い、理解まではいかないとしても、認識する。当たり前だがこれは故人の作家ではできないから、現存作家が参加するプログラムならはだ。またそれは、いわゆる難解な作品と言われがちな現代美術を、今後今治で展示したとしても、ILTSという先に作家に出会うプログラムがあることで地元の人にはある種の安心感が生まれ、アートへの出会いの間口を広げるのではないかと感じた。





あつ、もし今後展示する機会があったとしたら、場所は今回訪れた丹下建築が面白そうだ。丹下健三は愛媛県で中学時代過ごしていたこともあり、愛媛には丹下建築がいくつかある。今回、その案内も周山さんの知り合いの建築家の方にツアーをしていただいた。そのツアー中、丹下がコルビュジエに会ってはいないが、モダニズム建築っぽいものをつくったという事実を知り、それを深掘りして、この建築の中で展示するとうなるだろうかということも思いながら、何か新たな発見があるかとも思ったのは別の話。

そういえば、私が思う周山さんという人物の印象も書いておきたい。

周山さんと初めて会った時、正直、初対面の人の距離感がバグってる人だなと思った。しかしその後、私の広島や高知での展示に来てくれたり、逆に私が今治へ行ったりして交流を続けた。

「ART SAMPO」という、五、六名の作家の各作品が一ヶ月ごとに今治の飲食店や雑貨屋さんなどの店舗を移動していく（散歩していく）、一時的な展示鑑賞ではなく、馴染みのお店で何度か作品に出会う取り組みや、去年初めて（周山さんが今治での活動を開始して六年目）今治市の支援で開催されたILTSとは別のレジデンスプログラム「アーティスト・イン・今治」にも訪れたりして、話していくなかで、真摯にアートのことを考えているところが分かってきた。そんなこともあり、次第にシンパシーを感じる事ができるようになったと思う。やはりこういった再会が人を繋げていき、色々な偏見もほぐれていくのかなとしみじみ思っ

た。あと、アートを今治に根付かせるという、（ある意味で）一人相撲のような無鉄砲な計画は、周山さんみたいな人がいないと、美術の土壌が少ない土地では（当たり前だけど）かなり大変だ。だから、周山さんは開拓者の人で貴重な存在だと思った。

また話は飛ぶが、以前、高知の須崎市で実施されている「現代地方譚」というレジデンスプログラムに参加した。去年で一回目だった。この取り組みには須崎市の援助がある。そして実行委員会としてチームで運営している（チームと言ってもほとんど手弁当に近いので大変だ）が、今治での「アートを身近に」の取り組みはほぼ周山さんひとりでやっていて、そこは限界を感じることもあるだろうと思うし、ある程度の組織は必要だとも勝手ながら思った。ただ周山さんの熱意、また今治での人脈とこれまでの活動実績で、今後は少しずつだが活動の幅が拡大していきそうな予感があったのも事実。ILTSのトーク後の今治の方々との懇親会でも、運営面でも周山さんに協力したい人がいることが分かったから、きっと大丈夫だろうな、とも思った。

最後にILTSへ参加して改めて感じたこと。私も広島でささやかながら作家業とは別に、アートを地域に根ざす（したい）プログラムを二〇二二年から有志のチームを組んで進めている。自分にも新たな気づきもあり楽しいが、継続って本当に大変だ。でも継続とはそれが日常に近づくところでもある。逆に継続しなければそれは日常から遠のいていく。外から展示のためだけにアーティ

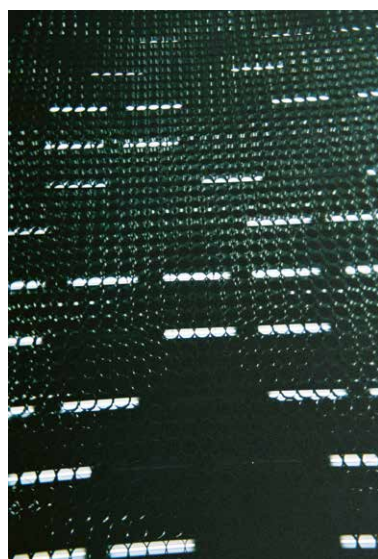
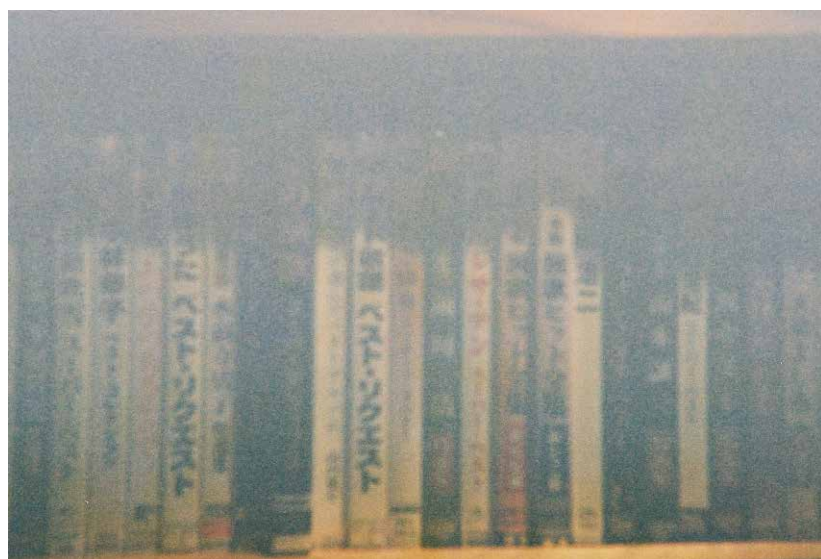
# 先に人





ストやディレクターを招聘するのではなく、「地域に根付いた人がやるから、アートがゆつくり土地に根付いていく」という「アートを身近に」する取り組みを実践している大先輩の赤井<sup>※6</sup>あずみさんの言葉をふとしたときに思い出す（ちなみにこの言葉は「アーティスト・イン・今治」のトークイベント時のもの）。

今後も共に今治、広島と各々の場所での中四国での「アートを身近に」という取り組みをささやかながら続けていきたいと感じたのだった。(諫山)



※5  
現代地方譚

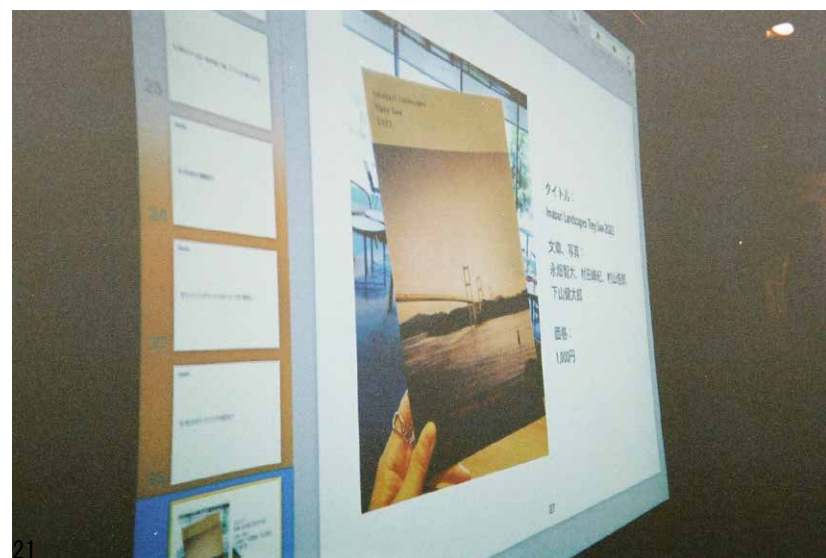
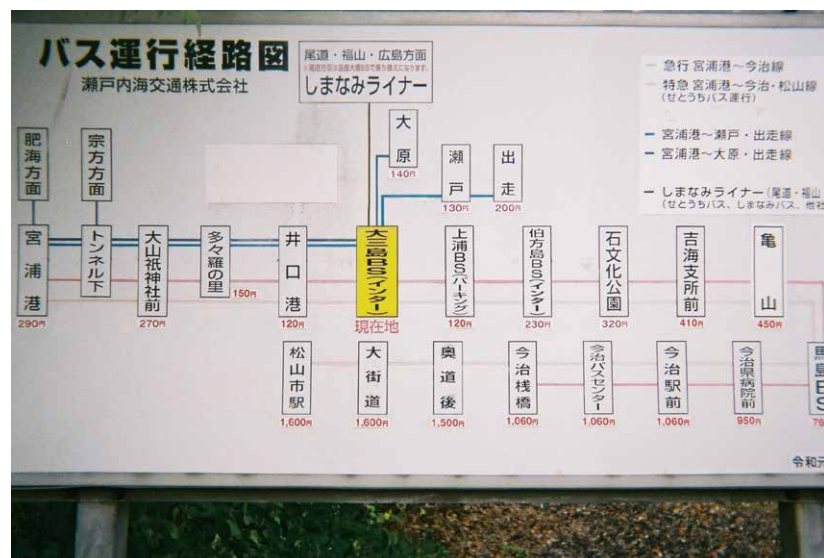
高知県須崎市で二〇一四年から続くアートプログラム。様々な表現者が地域に滞在し創作活動を行う「アーティスト・イン・レジデンス」、その成果発表と音楽・演劇公演や各種ワークショップ等、ジャンルを跨いで構成される地域の文化振興事業。

※6 赤井あずみ

鳥取県立美術館に近現代美術担当の主任学芸員として勤める傍ら、鳥取市中心市街地の旧横田医院を活用したアート・プロジェクト「HOSPITAL」やプロジェクトスペース「ことめや」の企画運営に携わる。



先に人





# 私

昔、まだ浪人生だった頃、私は予備校に通うお金を稼ぐために、様々なアルバイトを掛け持ちして働き詰めの毎日を過ごしていました。朝から晩まで働くだけの毎日に、私は浪人生のはずなのに何をしているんだらうという焦りと不安に押しつぶされそうになりながらも、忙しい日々任せて転がる様に過ごしていました。美術高校を卒業したとはいえ、全く経験も実績も無い只の生意気な若者だった私は、それでも自信だけはあって、将来自分がどんな作品を作るのか、どんな芸術家になるのかを思い描いていました。私は多分、彫刻家になって木彫作品を作るだろう。そしてアトリエにこもり寝食を忘れて制作に打ち込む。当時はそんな風に未来の自分を想像していたと思います。ある日、アルバイト先の仲の良い板前さんが「四条河原町の角に座っているオバちゃん占い師、あの行列出来ているところ。あそこ当たるらしいから占ってもらったら？ お金出してあげる」と言ってきました。その板前さんは占いが好きな方で私に持ちかけてきたのでした。多分、自分が占ってもらうのは怖かったんだと思います。同時に、暗中模索の貧乏な若者を何か応援したい気持ちがあったのかもしれない。今となっては確かめる術はありませんが、当時の私は、純粹に好奇心から「いいですね。いきましょー」と答えたのでした。バイトが終わった深夜に占い師のいる交差点に向かうと、いつも何人も行列しているのに、その日に限って誰もいません。もしもたくさ

神的にも肉体的にもかなり追い詰められていたのでした。バス停に着くと、遠くからこちらに向かつて手を振る人々が見えました。企画者の周山さんに広島島の諫山くん、そして初めましての赤羽さんと牧さんでした。遅れてきた無愛想なおっさんを暖かく迎えてくださいました。みなさん気を遣わせてしまい申し訳ないことをしたなと思います。それから車で右へ左へと島の道を進んでいく中で流れる車窓の風景を見ているうちに少しずつ元気が戻っていきました。このように私の「Ibari Landscapes」は、大三島に始まり、丹下健三にまつわる建築めぐり、芸予要塞ツアー、トークイベントと続きました。順に記します。

# 今 治 滞 在 記 Daisuke Kuroda



ん並んでいたら、また今度と言って、その日が来ないままだったかもしれません。その占い師は手相占いをする人で、私の手をまじまじ見てこう言いました。「あなたは何か、ウロウロとあちこちを飛び回る仕事をするようになりますね」。私はそれを聞いて少しがっかりしたのと同時に、何だ、デタラメなことを言うインチキじゃないのかと訝しみました。だって、私は芸術家を志しているわけですから、そんなバカなことがあるはずがありません。彫刻家が、家に、アトリエにこもって制作するはずの彫刻家が、ウロウロあちこち飛び回るわけがないじゃないか。と、こう思ったわけです。他にも色々言われて、何となく当たっている様な、しかし思ったような内容ではなく、お金を出してくれた板前さんも、私も、何か少しがっかりして興醒めしてしまったのでした。あれから二〇年ほど経った今、驚くべきことに私はなんと、ウロウロとあちこちを飛び回る感じで芸術家として生きています。占い師が言った通りとは言わないまでも、どう言うわけかそんな人生を歩んでいる私がいるわけです。不思議なことです。対馬から福岡へ向かい新幹線に乗って福山へ、そして待ち合わせの大三島のバス停に向かうバスの中でほとほと疲れ切った私は、瀬戸内の島々を見ながら、夢か走馬灯の如くグツタリとそんなことを思い出していました。二〇二四年の九月は、なぜか急に予定が詰まり、沖縄、東京、韓国、北海道、対馬と移動が続いていました。おまけに謎の強風で対馬から飛行機が飛ばず、「Ibari Landscapes」へは、すでに二日遅れての参加となっていたこともあり、申し訳ない気持ちと疲れで精



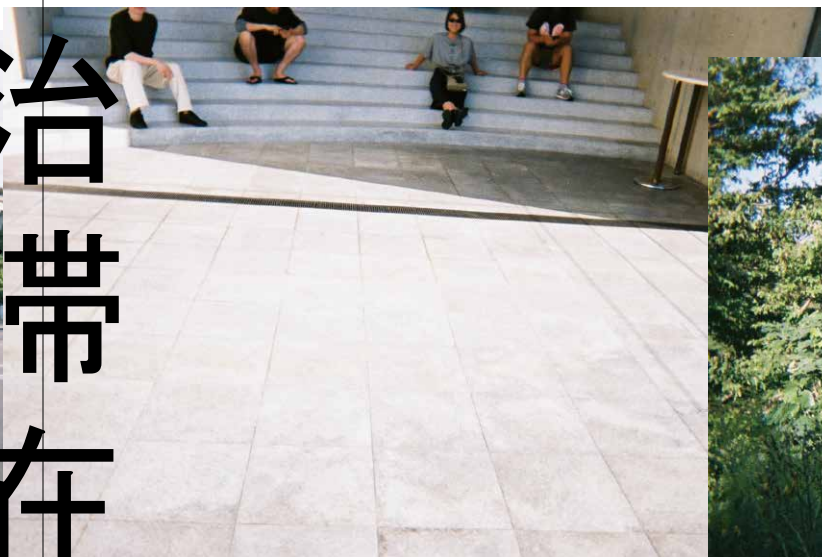
バス車中のゆめ



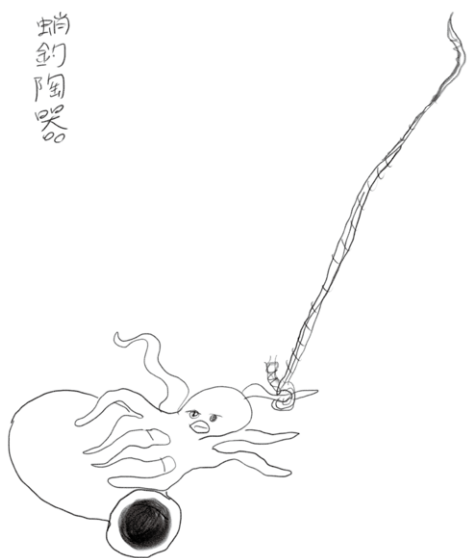
大三島には戦後に大阪で活躍した女性彫刻家、羽柴小枝子<sup>はしかえこ</sup>さんの作品がまとまって保存展示されているという情報があつて、一度見に行けたらいいなと思っていました。しかし情報が古く、今も展示してあるのか、どこに展示してあるのか掴みきれずにいました。私が大三島に上陸した時は、先に述べたように疲れ切つてグツタリしていました。何とかしてこの彫刻家の作品を探すこともできたかもしれないのですが、その時は曖昧な情報を頼りに動く元気がありませんでした。また他の皆さんを振り回すのも申し訳なく思つて遠慮したのでした。島のグネグネした道を車の助手席に乗つて移動しながら、お互いの自己紹介の様な話をしたり、他のアーティストや展覧会の話をしながら過ごしました。そのうちに、「ところミュージアム大三島」という不思議な美術館に到着しました。大きな階段状の展示室を下へ下へと進んでいく作りになった美術館で、彫刻作品が多く展示してありました。どんな経緯で何の因果でこの場所にこの作品たちが展示されているのだろうかとおぼんやり、最下層の海に向かってひらけた場所で座つて考えました。周山さんが昔はここでコーヒーが飲めたけれどコロナの後にそのサービスが無くなったという話をされていて、どんな場所にも歴史があるんだなあと、海の小さな島々を見つつ思いました。相手がボーッとしていたんだと思います。だからという訳でもないのですが、もうひとつ今治に行ったら調べてみたいと思つていただけ、言い出せなかったことがありました。それ

うちに車は島を離れ今治市街地に差し掛かっていたのでした。

# 今治滞在記



は、蛸釣<sup>たつとり</sup>陶器と呼ばれるもののことで、それがあつた場所に行つてみたかったのです。蛸釣陶器というのは、つまり、タコが陶器や貝殻などの穴のあるものに入り込み棲家とする習性を利用し、タコに紐をつけて海底から拾わせた陶器のことです。よく知られている蛸壺漁は、タコが好きそうな壺を沈めてタコを取る漁法ですが、タコは思いのほか綺麗好きでツルツルした表面のものを好むそう。タコに壺に入ってもらうには壺中を綺麗にする必要があるそうです。つまり海底に沈んだ陶器はタコにとっては魅力的に映るようで、そうしたタコの気持ちを利用してトレジャーハントしたのが蛸釣陶器というわけです。これは寝ぼけた私が突然言い出したこととかではありません(今治・タコ・陶器で検索してみてください)。この背景には、今治周辺の海の交通事情、海難事故で沈んだ船が少なくなく、その積荷に多くの陶磁器が含まれていたことがあります。そういう訳で、一九世紀には、タコによって陶器の存在があると潜水夫によって取り尽くされてしまうこともあつた様ですが、そうすると、途端に話がつまらなくなってしまう。やはりタコが取つてくる、人間の意思を離れたところからやって来るところに魅力があるのだと思います。それにしても、あの柔らかなタコにどうやって紐を縛り付けるのだろうかという謎が残ります。という様なことを考えながら、しかし蛸釣陶器のことを説明するだけで(タコと壺が若干異なる意味で何度も登場してくるから)ややこしく、しんどくなる感じもあり、その時の私には、そこに行きたいと言いつつ気が全くありませんでした。そうしている

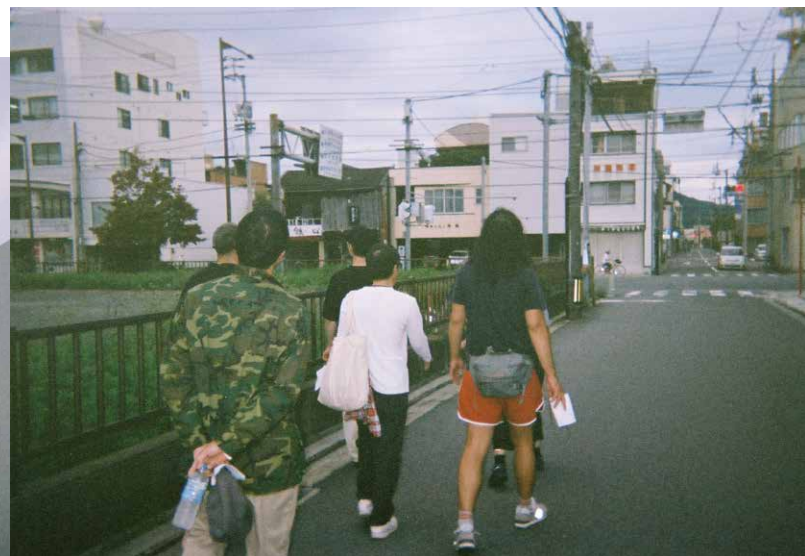


蛸釣陶器



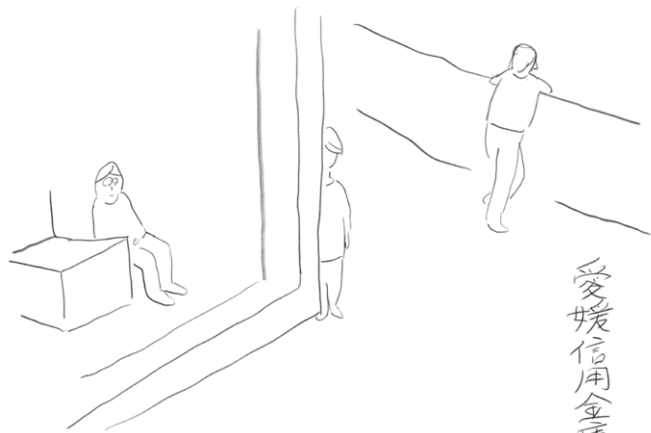
今治の市街地では丹下健三の建築を案内してもらいました。私はそれほど建築に詳しくありません。建築家の名前くらいはわかるけれど、どんな作風で何を考えていた人かまではよく知りません。しかし、丹下健三については広島平和記念資料館あたりをやっている関係で大雑把にどんなものを作っているか、作風くらいは理解しているつもりでした。最初に「今治地域地場産業振興センター」というところに行きました。そこには円形のホールがありました。なんでもそのホールは、展覧会の会場としても使われることのある、東京の青山のスパイラルという建物のイメージが取り入れられているのではないかとのことでした。青山のスパイラルの建築家は丹下の弟子？にあたるとかで、丹下はそうして身近な建築家の作風を踏襲することがよくあったと解説がありました。要するに自分が良いなと思ったものを取り入れていくということ、非常に効率の良いやり方な訳ですが、しかしこれは一歩間違えるとパクリということにもなりかねないと思うのですが、その辺は世界的建築家として、うまくかわしているようです。あまり細かいことは覚えていませんが、そんな話だったと思います。美術の世界でも、この作品あの人のアイデアをパクったんじゃないのか？という疑問を抱くことはよくあることです。実際にパクっている人もいます。しかし知らないうちに影響を受けてしまうことはどんなことにもどんな人にもあるもので、この線引きは難しいと思います。その後、「愛媛信用金庫今治支店」を訪れ

# 今治滞在記



ました。施設の方が親切に対応してくださいました。先に見た「今治地域地場産業振興センター」は一九八五年に建てられたのに対し、この「愛媛信用金庫今治支店」の方は一九六〇年竣工ということで大分古いもので、確かに建物もその設えも異なるものでした。ドアの取手とか細かな金具までこだわが見られ、独特のかっこいい空間が広がっていました。「ワーこれはすごい」と皆、端々で感嘆の声をあげ、自然に「ここなら展示してもいいなあ」「展覧会できるなあ」という感じになっていきました。一方、私はというと、来る途中にあった疲れがまた振り返ったような感じになって、状況にうまく反応できず、割と静かにしていました。それから屋上に上がって風に当たって今治の街を眺めて少し落ち着きました。それまで一〇人くらいの人間の束でうろうろしていたはずが、いつの間にか一人になっていました。この建物の屋上は入り組んだ構造になっていて、迷路というほどでもないけれど、エッシャーの騙し絵のような感じの虚の空間がバラバラあって、思い思い自分の心境にフィットする場所できつっているようでした。ちょうど太陽が沈んだ頃で薄暗い明かりが印象的でした。その後、歩いて数分のところにある今治市庁の建物を訪ねた頃には、辺りはもうすっかり暗くなっていました。という記憶だけど、実際にはそれほど暗くなかったかもしれません。目を瞑っていたはずはないので、やはりもう夜になっていたのだと思います。丹下のことはそんなに好きではないけれど、彼の建築を考える大変良い機会となりました。その後、夜に皆で食事に行き一日が終わりました。

愛媛信用金庫今治支店





今治でどこか行ってみたいところがあるか？と事前に聞かれた時に、私は芸予要塞をリクエストしました。芸予要塞というのは、今治市のウェブサイトによると、日露戦争当時、ロシア艦隊の来襲に備えて造られた要塞とのこと、それまで長崎の対馬で同じ時代の要塞を見たことがあったので、今治ではどんな感じか、保存状態が良いとの前情報もあり訪れてみたいと思ったのでした。芸予要塞は小島という小さい島にあって船で行かなければなりません。波止浜港というところから船に乗りました。この時は地元のガイドさんが案内してくださいました。ガイドさんは八〇代のお爺さんで、確か、高松で生まれて今治に來たとか、そんな話をされていたと思います。小さな船で十分くらい波に揺られて小島につきました。島についてからは、要塞のある場所まで歩く訳ですが、どのくらいの距離か忘れましたがなかなかの山道で、しかも道のあちこちに猪が体を擦ったあの独特の跡があり、（猪についているマダニが落ちるため）マダニを恐れている私は気が気ではなく、また体力もなく、一瞬で汗だくのヘトヘト（ベトベト）になってしまいました。道中、ガイドのお爺さんが八〇代とは思えないほど元気な方で、木の棒で、道にかかる蜘蛛の巣を払い、時々そばに生えた木を叩いてみたりと軽やかな気遣いをしてくださいました。それなのに私は全然余裕がなく自分のことばかり考えてどうしようもないなど反省しました。そうこうしているうちに、要塞に到着しました。要塞の建物自体は、対馬のそれとほ

# 今治滞在記



とんどの感じでしたが、確かに保存状態は良いように感じました。観光のルートとしてかつて整備していたからか、あるいは要塞として使われなくなった時期が比較的早かったからか、実戦で一度も使われなかったからか、詳しい理由はわかりません。印象的だったのは、ガイドのお爺さんが教えてくださった話で、一九二六年の八月一五日にこの小島の要塞施設を標的にした爆破演習が行われたという話で、日本の陸海軍が小島に目掛けて爆破演習を行ったが、一週間にわたる演習にもかかわらず、破壊されたのは北部砲台の一角だけで、演習の開始時には周辺に大勢の観客が押し寄せたが、あまりにつまらないのですぐに誰もいなくなつたという話です。思い通りに行かないことは、大きなことにも小さなことにもあります。うまくいかない方が良くいことだってあります。この時の軍事演習もそうでしょうが、私たちも芸予要塞の小島を甘く見ていて汗だくのドロドロになってしまいました。一応断っておくと、私は戦争遺構に興味を持っていますが、それは戦争が怖いから、戦争がどんなものだったのかを理解したいという思いからです。決して軍や戦争、武器や兵器が好きというわけではありません。ですから、この芸予要塞の旅は汗だくのドロドロの状況にピッタリ、嫌な気持ちにちゃんとなりました。それで良いのです。やはり戦争は最悪だなと思いました。ガイドのお爺さんからは元気をもらいました。





芸予要塞に行った同じ日の夕方からはトークイベントでした。もう何を話したかは忘れてしまいましたが、とにかく盛況で、今治だけでなく様々なところから、遠くは別府からお客さんが来てくださいました。大学時代の友人は誰も来てくれませんでした。来てくださった方が友人の友人であったり、話が弾みました。ギャラリィをされている方や芸術祭の様な事をされている方もおられて、今治周辺で様々な芸術活動があることを初めて知りました。京都のように湿った感じではなくて、皆さん瀬戸内っぽいカラッと爽やかな方達ばかりで、とても希望を感じました。周山さんの活動や、それぞれの活動がうまく交差し結実すれば面白い展開がありそうだなと思いました。ともかく、皆様温かく迎えてくださったって本当にありがとうございます。さて、トークそのものは別に記録もあることだと思えますのでこのくらいにして、ここでは他に印象的だったことを少し述べて、この感想文のようなものを締めくくりたいと思います。トークイベントの前になぜか奇妙にまったりした待ち時間がありました。私は芸予要塞のドロドロを払拭すべくユニクロで新しいTシャツを買うことを目論んでいました。市街地なので、すぐ近くにあるだろうと思いついていたのですが、近くに店舗がなく、歩いていく気持ちは一瞬で消えてしまいました。代わりにスッカリする濡れたやつ、アレはなんというのでしょうか、スースーしてスッカリするコンビニで売っている体を拭くものを買いにコンビニに行くことに

# 今治滞在記



しました。道すがら、なぜか今治の街が少し違って見えたような気がしました。それもそのはずで、それまでは車で案内していただくばかりだったので、その時が初めて日中に今治の街中を自分の足で好きなように歩いた瞬間だったのです。同じ道でも移動する速さによって見えるものが違います。トークイベントの会場からコンビニまでは多分三〇〇mくらいしかないのですが、途中に大きなスーパーがあったり、そのスーパーにはトイレがあったり、ビルの空き店舗がチラホラ立ち、商店街にはほとんど人がいませんでした。こうした風景は今治らしいものというよりは日本のどこにでもある風景でわざわざ書くようなことではないかもしれません。しかしそれでも、そこにある普通の暮らしにこそ、その土地らしさが滲むというもので、同じように見えるコンビニひとつとっても実際には地域性のようなものが漂っています。それでは何が見えたのか、何か変わったことがあったのかと問われれば、特に何かを見たわけでも何があったのでもありません。しかし何か新鮮な、微かな未知との遭遇の瞬間の目元だったような、世界を区切る透明な膜の横を通り過ぎたような、そんな気がします。あと数日滞在したら、もう少し今治のことが理解できたのではないかと思います。期待を込めて、それはまた別の機会に。(黒田)





## 夜

型なので二時間くらいしか寝られず、始発に近い電車で向かった初めての成田空港。東京の西側からだとか遠く、おまけに今回乗る飛行機は、駅に着いてからもターミナルまでの道のりが長かった。いったい何の因果でこんなことに…と、思ってしまったそうになるが、前日に早寝すればいいだけの話ではある。そもそも朝型の方が社会に適合できるのに、どうしても夜型になってしまふ。時間配分もいつもギリギリで、遅れてしまうこともしばしば。今回はこの文章の提出が大幅に遅れてしまった。周山さんをはじめ、同行した赤羽くん、諫山くん、黒田くん、そして「Landscapes They Saw 2024」に関わった人たちに、心からお詫びしたい。

滞在に関しては、とにかく遅れずに今治に着くことを心がけていたので大丈夫だった。運よく搭乗手続きを完了したときには、無事に滞在を終えたような清々しさすらあった。機内に乗り込むと、すぐ後ろの席に赤羽くんらしき人を見つけたが、そのときは話しかけなかった。人見知りではないが、そういうことがある。

松山空港の出口で赤羽くんと合流し、周山さんの車に乗り込んだ。そこに諫山くんも加わり、「伊豫水軍」で昼ご飯を食べた。鯛の釜飯、刺身、天ぷらという、いきなり豪華な定食。入店後に案内された席が窓側じゃなかったため、周山さんが「海が見える席にしてくれたらいいのにケチだな」と店員さんに聞こえそうな大きな声で言っていたのがおもしろかった。その後、無事に席を

# 今治の風景

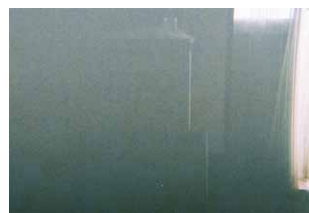
## Jujiro Maki

つづいて車から自転車に乗り換え、しまなみ海道をサイクリング。この巨大な橋がなければ、自転車で走りながら絶景を眺めることはできなかったんだと思うと、人間の欲望と行動力はすごい。海の上を漕ぐのは実に爽快で、自分と赤羽くんは軽い気持ちで、次なる目的地の亀老山展望公園も自転車目指すことにした。赤羽くんから介護の仕事について興味深く聞きながら並走していたのもつかの間、ものの二合目くらいで、二人とも坂道を登り続けるのがしんどくて会話どころじゃなくなった。いったん自転車を置いて、後から来た周山さんの車に乗せてもらうことに。最初から車に乗っていた諫山くんの冷静な判断は正しかった。頂上にある展望台は、今の自分たちと同じ年くらいだった隈研吾による設計で、眺めはもちろん素晴らしいのだが、そこに至るまでの視線の展開が、空間によって見事に設計されていた。帰りは下りなので、再び快適な自転車の時間が訪れた。夕陽が差すエモい写真を…と、思ってたが、今度は指が入ってるんです。

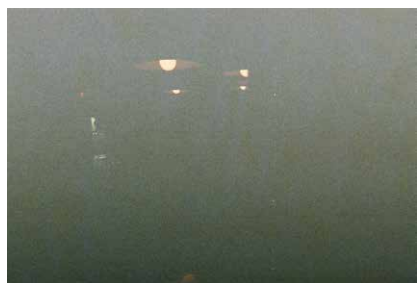
夜は周山さん行きつけの「鳥林」へ。今治の焼き鳥は串に刺さってない上に、鉄板で焼かれていた。自分が知ってる焼き鳥という料理は、串に刺さっていることがアイデンティティだったんだなと知る。せんざんきという骨付きの唐揚げも食べた。ビールに合いそうだなあと、思いつきながら、お酒が飲めないのでコーラを飲む。うまい。そのあとは「ジャグ」という喫茶店へ。ひと癖ありそうなマスターと、いい感じの店内。ここぞとパチリ。もちろん真っ暗。

移動できて、海を見ながら食べてもらいたいという周山さんの願いは叶った。願いは口に出せば叶う。実際に景色も味もおいしくて満たされた。今治に来てよかったと、もう思った。

「株式会社丹後」でタオル工場の見学。案内してくれた丹後さんの話ぶりに引き込まれる。工場内では、つい機械のロゴや段ボールに印刷されたグラフィック的なものに目が行く。デザイナーか、と自分にツッコむ。まあ今回の参加者でデザイナーは自分だけなので、こんなものを撮る人はいないだろうと写ルンですのシャッターを押した。しかしフラッシュを焚き忘れて、写らないんです…という凡ミス。



そのあと予定表にはなかったが、周山さんの家に少しだけ寄ることになり、コレクションを見せてもらう。一風変わった建物で、室内にはたくさんの作品や風情のある家具など、周山さん夫妻が気に入ったものに囲まれた空間が素敵だった。





初日から充実していた。こんなにしっかりと観光したことはないかもしれない。宿は「サンライズ糸山」。慣れない場所で相部屋だと眠れないことが多いので、わがままを言ってひとり部屋にしてもらった。特別扱いで申し訳ないが、よく寝て朝を迎えられた。

二日目は、しまなみ海道で尾道市の生口島に行き、そこからフェリーで隣の島にある岩城造船へ。周山さんのパートナー、あきちゃんが案内してくれた。昨日、しまなみ海道の橋がでかすぎる人工物であることに思いを馳せたが、造船もやばかった。全長二〇〇mの船を、人間が鉄を切り貼りして造っているという。土曜だったので作業はしてなかったが、加工の途中で置かれた鉄板や、そこに走り書きされたメモなどの痕跡から、造っている様子が目に浮かぶ。目の前にそびえ立つ、もはやスケール感のわからない大きさの船が、人の手で造られているという事実にくらくらする。「もはやアート」という言い回しを見聞きすると、アートのことを局所的に捉えてるなあと思ってしまうが、もはやアートです。別の造船所では全長四〇〇mのコンテナ船を造っているらしい。どうかしている。

その後に見た耕三寺もすごかった。実業家の耕三寺耕三による母への想い、その強すぎる気持ちで造りあげた異色の寺。ひ孫の耕三寺さんに案内してもらった。造船所でひとしきりやられた後に見たせいもあり、見所と情報量の多さでキャパオーバー。崇高なの、胡散臭いの、どっちなんだい。

見終わったあと、体力のない自分は、寺の前にある「万作」で、たこ飯を食べながら放心。たこみに脳が九つあれば、やばいとかすごいとか以外の語彙もあっただろう。

腹ごなしに、海沿いにある宮脇愛子の「うつろひ」を見た。従来のマッチョな彫刻ではなく、しなやかな彫刻というものを打ち出した人だと諫山くんが教えてくれた。大三島へ移動して、運悪く遅れての参加になった黒田くんをバス停で待つ。赤羽くんと諫山くんが外でタバコを吸っている間、周山さんと車の中で、よくこんな企画を定期的にやってるねという話をした。綿密なスケジュールを立てて、いろんな人にガイドを頼み、道中ずっと車を運転する、その労力。しかもすべての滞在費を自費で負担しているという。なんでそんなことを？と聞くと「好きなアーティストを地元と呼んで、四日間ずっと一緒に過ごすことがおもしろいから」と言っていて腑に落ちた。アーティストのインプットや、地元のアートに対する意識を活性化するなど、他人や社会のためが第一ではなく、そもそも自分のためにやっているんだと。

大三島の「ところミュージアム」という気持ちのいい現代美術館でのんびりと作品を見てから、今治市の市街地に戻って丹下健三の建築めぐり。建築家の長井さんによる、丹下愛のこもった視点から、地場産業振興センターと愛媛信用金庫今治支店を案内してもらう。信金は職員の方のご厚意によって、屋上まで隅々と見ることができ貴重な機会になった。事前に周山さんから、長井さんへ

# 今治の風景





の手土産を頼まれていて、フェイスブックを見たらカレー部という活動をしているのを知り、「朝岡スパイス」のカレー粉二〇種類セットをあげた。数日後にそれを使ったカレーを投稿していただいて安心。夜は「頼登」で、おいしい刺盛りなどをあきちゃんと長井さんも一緒に食べた。長井さんは話すが本当に好きといった感じで、映画の話を延々としていた。周山さんはもういいよと言っていたが、諫山くんはちゃんと話に乗って好きな映画の話をしていて。自分は食べながらそれらの映画をメモした。

翌朝は、「珈琲道場」でモーニングを。その向かいにある河野美術館の一角に、阿部誠一の「女（下着）」というすごいタイトルのブロンズ像があった。それを検索して見つけた「裸婦像美術館」というウェブサイトもなかなか。街なかに突如現れる裸や薄着の女たち。それが成立した時代は、ポリコレの現代からは遥か遠くに感じる。



# 今治の風景

「かねと食堂」で昼食。カツ丼が好きなのでカツ丼にした。カツ丼はハズレがなくて大体うまい。うまいのに、赤羽くん和諫山くんが食べていたカツカレーがもっとうまいように見えた。ひと口もらえばよかったと言えなかった、と店を出てから言った。

喫茶「アポニー」に移動して、今夜のトークに向けたゆるい作戦会議。まったりした時間を過ごす。ずっと移動やインプットを続けていたのでもあり、その告知物を数年前からデザインしている自分としては、ついに来訪できてちょっと感慨深かった。「美太」や「OTTOMANI」にもぜひいつか行きたい。コーヒーフロートを飲みながら、たまたま「芸術激流2024」というアートの告知インスタライブを、佐塚くん（国立奥多摩美術館の館長）たちがやっていたので、みんなで見てコメントした。画面に表示された視聴者数は、自分たち以外はひとりだけだった。



フェリーで小島へ渡り、黒田くんが行きたがっていた芸予要塞へ。葛西さんというガイドのおじいちゃんが、八〇代なのに山道や階段を難なく登り、よく喋るので驚いた。戦時中の話を聞いていると、今にして思えば日本が大国に勝てるわけないのに、当時は多くの人が勝つと信じさせていた、信じたかったんだと、涙ぐましい気持ちになる。



今治ホホ座でのトークでは、赤羽くんは作品写真をたくさん見せながら話していて、武蔵野美術大学で「自分をプレゼンをする」というテーマの授業で見たときの赤羽くんだ、と思った。諫山くんは実直に語り、黒田くんは飄々と語り、それぞれの作品を実際に鑑賞したくなった。トーク後は、聞きにきていた人たちと「焼鳥パーク」で懇親会。最初は初対面の人たちと細やかに接していたが、途中から疲れてぼーっとしたり、みんながわいわい話しているのを眺めたり、マイペースに過ごした。





宿に帰り、大浴場に行くと、自分以外の三人が飲み会の熱も冷めやらぬという感じで話し込んでいた、この夜が「Ibary Landscapes」のクライマックスだったようだ。

そういえばトークの後、テンション高めのおじさんから「今日もつとも心を動かされた人に、プレゼントをあげようと思って！」と発泡酒を一缶もらったのだが、飲めないので赤羽くんにあげた。翌日、赤羽くんは「宿に置いてきた！」と言っていた。



# 今治の風景

今回の滞在では、今治の魅力を実感しすぎて、地元の岡山よりも詳しくなったかもしれない。好きな町は？と聞かれたら、盛ることなく今治だと答えられるだろう。周山さんのおかげである。最終日に四人から花束のひとつでも渡した方がいいのでは、とすら思っていた。実際には渡さず、最初に提出した文章はひどい内容で、書き直した文章も締切を破り倒し…むしろ恩を仇で返しまくっているが、心から感謝している。本当にありがとう。

赤羽くんは気の向くまま自由な感じ、という意識があるのかどうかはわからないが、その穏やかでオープンな空気感と、時折見せる鋭さが印象的。諫山くんははじめで、人に合わせる優しさに親近感を感じるからか、接しやすい。黒田くんは饒舌なのに不器用で、アンバランスな魅力がある。思い返したら、またみんなでご飯でも食べたくなってきた。周山さん企画お願いします（牧）

四日目の朝はカフェレストラン アメリカへ。フレンチトーストを頼んだら、味噌汁がついてきた。前夜、お風呂で話していた交通費の相談を、黒田くんが周山さんに持ちかけていたが、その場ではいったん保留に。食後、周山さんが運転する車の中で、赤羽くんがアーティスト・イン・レジデンスに参加する際のアーティストの立場から、黒田くんの要望について丁寧に補足をしていた。赤羽くんはなんていい人なんだろうと思った。後日、その話は無事に丸く収まったようだ。

そのあと、さくつと今治駅でみんなと別れた。怒涛の三日間だったので、ちょっと名残惜しかった。赤羽くんが「みんなと一緒にあったのがグループ展だとここまで仲良くなれなかった」と言っていて同感。そこから特急しかかぜで約二時間、滞在中は交流の浅かった黒田くんとノンストップで話し続けた。岡山に着く頃には、寂しさは跡形もなくなっていた。





Q. アート／美術との最初の出会いはいは？

赤羽 「美術を広く捉えると、漫画との出会いです。父親の影響で、水木しげるや、つげ義春など、ガロに載っている漫画をよく読んでいました。現代美術はテレビで奈良美智さんのドキュメンタリーを見て、ファンになったのが最初の出会いです。」

黒田 「元々、作ったりするのが好きなタイプの子供でした。母親が芸術学部のある学校を卒業していて、学校の同窓会の卒業制作展の図録が家にあったのを読んでいた。」

諫山 「小学生の時に大原美術館で吉原治良の作品を見たのを記憶しています。あと、高校生の時に名古屋美術館で観たボルタンスキーの作品にも感銘を受けました。」



# トークイベントを振り返る



二〇二四年一〇月六日一六時三〇分より、トークイベントを広小路通りに面した場所にある今治ホホ座で実施しました。

Inabari Landscapes 身近にアートがある暮らし  
アーティストに会おう編 Vol.2

日程：二〇二四年一〇月六日(日)  
時間：16時30分～18時30分  
料金：千円  
会場：今治ホホ座 今治市共栄町一三三

トークイベントでは冒頭、一五分ずつの持ち時間でゲスト四人からこれまでの活動についてのお話を伺いました。その後休憩を挟んで、「身近にアートがある暮らし」について一問一答のディスカッションを行いました。





Q. アーティスト／美術家／デザイナーの道を選んだきっかけは？

黒田 「高校進学するときに、魚釣りばかりしていたので漁師になろうと思っていました。けど、周りに諭されて、美術の高校があることを親から聞いて、絵の勉強を始めて、これだ！ っとなりました。それまであった、ストレスから解放された実感もありました。」

牧 「大学の図書館で、デザイン年鑑というデザインがたくさん載っている分厚い本を次から次へと見ていたら、自分でもできそうだなと思ったのがきっかけのひとつだと思います。」



Q. 制作スタイルは？（制作場所、時間、アイデアの練り方など）

赤羽 「制作場所はスタジオで、時間は娘を学校に送り出した午前九時から、娘を学童保育に迎えに行く午後六時までという感じです。自然光が入っている時間帯が良いです。アイデアは車を運転しているときに閃くことが多いです。」

牧 「主にパソコンの前で、たまに印刷会社など。オンオフの切替えがないので起きている間は何かしら考えたり作ったり、さぼったり。アイデアは依頼人と話していると浮かぶことが多いです。」

諫山 「アトリエでひとりですべてやっています。時間は日中。アイデアの練り方は本を読んで、作ってみて、今まで制作した作品と対話しながら作るのがやりやすいです。」



# トークイベントを振り返る



Q. 作品制作の醍醐味は？

諫山 「自分が見たことないものを自分が最初に見られるのが面白いです。」

黒田 「作る喜びがあります。作ったものを展示した後に喜びを感じることもあります。僕の好きな作家に、百年前くらいに活躍した作家がいるのですが、その作家の催しに行ったとき、あまり知られていない作家にも関わらず、様々な場所から訪れたいろんな人がその作家について語っているのを見て、作品の力を感じ、身が引き締まる気持ちになりました。」

牧 「いいアイデアが浮かんだとき、デザインを見た人から反応があったとき、賞をもらったとき、それぞれの嬉しさがありますが、完成したときに自分の中に手応えがあることが大切です。」

赤羽 「展示会場に人が入った時が嬉しいです。その瞬間に達成感を感じます。」



Q. 気になるアーティストの共通点は？

赤羽 「僕が絵を描いているので、絵を描いている人が気になります。全然気にならないアーティストの方が多いです。二年前、パリでゴッホの作品見た時は、刺さりすぎて涙を流してしまいました。」

牧 「作品になんとも言えない魅力があること。コンセプトや作り方も面白いと更に気になります。」

黒田 「展示会を企画することもあるのですが、その時に伸びると思うアーティストは、自立している、独自性がある、しつこいっていうのがあります。自立している、というのは経済的にというよりは、どこいってもやっていける力があるという意味です。」

諫山 「アーティスト自身には興味はなくて、作品に興味があります。シンプルなアイデアなのに光るものがあるか、が大事です。」





赤羽 史亮  
Akahane Fumiaki

一九八四年 長野県生まれ。長野県茅野市在住。  
二〇〇八年 武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。生命の根源的な力をテーマに、過剰な物質感が伴う絵画、立体作品を制作。主な展覧会に、個展「Soi Psychedelia」(CAVE-AYUMI GALLERY、東京、二〇一三)、『個展「SOILS AND SURVIVORS」(諏訪市美術館、二〇一三)、『「ART SANPO 2023」(Imabari Landscapes、愛媛、二〇一三)、『VOCA展2023 現代美術の展望―新しい平面の作家たち―」(上野の森美術館、二〇一三)などがある。



諫山 元貴  
Genki Isayama

一九八七年生まれ、広島県在住。二〇一一年広島市立大学芸術学部博士前期課程修了。共同アトリエ「スタジオピンクハウス」にて精製された土、マネキン、観葉植物と戯れながら、複製物のオリジナリティを日々探りながら制作している。また学生と学芸員とアーティストが、作品制作の思考プロセスや技法について対話、考察を継続していくプログラム「Pink de Tea Time」の企画を行う。最近の主な展覧会に、『個展「Doily」(hakari contemporary、京都、二〇二四、キヌレーター…鵜尾佳奈)、『現代地方譚11…郷と土のはなし」(すさぎまちかどギャラリー／旧三浦邸ほか、高知、二〇二四)などがある。

# アーティ ストプロ ファイル

《cell/skin/hole》二〇一三

木材、スチールプレート、野営用テント、ハトメ、番線、コットン、麻袋、麻紐、ボンド、ジェルメディウム、アクリル、砂、麻繊維、蜜蝋、綿糸、サイザル、カラビナ

2780×5200×970mm

「赤羽史亮 SOILS AND SURVIVORS」(二〇一三)、『諏訪市美術館』より

© Fumiaki Akahane, Photo Go Itami, Courtesy of CAVE-AYUMI GALLERY



《Objects #21 (部分)》二〇二四

ビデオ(ループ、無音)







黒田 大スケ

Daisuke Kuroda

一九八二年京都府生まれ。二〇一三年 広島市立  
大学大学院博士後期課程（彫刻）修了。取材を基  
に、社会から忘れられたような存在に光をあて  
るように作品を制作している。時々、展覧会も  
企画。最近の主な展覧会に、「art resonance  
vol.01 時代の解凍」（芦屋市立美術館、  
二〇二四）、「コレクション・ハイライト+コ  
レクション・リレーションズ」村上友重+黒田  
大スケ+広島を視る」（広島市現代美術館、  
二〇二三）、「DOMANI・明日展 2022-23 百年ま  
えから、百年あとへ」（国立新美術館、二〇二二）、「  
あいち2022」（青木製陶所「常滑」、二〇二二）  
などがある。



牧 寿次郎

Jujiro Maki

一九八五年岡山生まれ。武蔵野美術大学卒業。東  
京にてフリーランスのグラフィックデザイナー。  
企画、レイアウト、印刷、流通などのプロセスに  
おいて独自性を探る。主な仕事に、展覧会のチラ  
シ「芸術激流 ラフティング+アート」（多摩川、  
国立奥多摩美術館、二〇二二）、「光岡幸一展 ぶ  
つぎりのゼッター120%」（ガーディアン・  
ガーデン、二〇二三）、書籍『大前葉生 柴犬二  
匹でサイクロン』（書肆侃侃房、二〇二二）、雑  
誌『広告 Vol.413〜417』（博報堂、二〇一九〜  
二〇二三）、カレンダー「アイデア ニューカレ  
ンダー」（誠文堂新光社、二〇一八〜二〇二四）な  
どがある。

# ア ー テ ィ ス ト プ ロ フ ィ ー ル

《海くゆけ》二〇二三  
ジュネ 08:46

The 7th Changwon Sculpture Biennale “silent  
apple” 2024 Exhibition installation view,  
2024, Photo by studio SUJIKSUPYUNG (Cheolki  
Hong), Courtesy of Changwon Cultural  
Foundation・The 7th Changwon Sculpture  
Biennale 2024



《芸術激流 ラフティング+アート》二〇二二  
トレーシングペーパーにレーザープリント、川に  
流したあとで乾燥





Imabari Landscapesは、「身近にアートがある暮らし」をコンセプトに、二〇一八年から愛媛県今治市で実施しているアートプロジェクトです。国内外で活動している現代アートに関わる人びとを招聘し、旅をする企画「Imabari Landscapes They Saw」からスタートし、これまで二〇一八年、二〇二〇年、二〇二二年、二〇二四年の四度にわたり計一六名のゲストを迎えてきました。新型コロナウイルス感染症の拡大により、人の移動が難しくなった二〇二一年から、今治市内の店舗を人の代わりにアート作品が回遊する展覧会「ART SANPO」を開始しました。また二〇二三年には、今治市の委託を受けて、「アーティスト・イン・今治」の企画運営に携わりました。

#### ミッション

Imabari Landscapesは、地域に住まう一人一人が画一的になることなく、多様で、自分らしい生き方を選択できる土壌を醸成していきます。そういった生き方を選択できる扉の一つとして、本プロジェクトは「アート」を切り口に企画・運営しています。アートをはじめとする「文化」には、他者や異文化を知り、好奇心を掻き立て、まだ見ぬ世界を開く役割があります。本プロジェクトは、同時代に生きるアーティストや、彼・彼女らの作品を街に接続することで、アートの思考に触れる機会を創出することを目指しています。

# Imabari Landscapes

#### プロジェクトの紹介

##### 1. Imabari Landscapes They Saw

ゲストは滞在中、今治市内の観光名所などを訪れ、サイクリングや釣りといったアクティビティ、史跡訪問などを通して今治の歴史や文化を知る時間を過ごします。最終日にはトークイベントを実施し、今治に住む方々とアートの可能性や、街の今後について意見交換も行います。

##### 2. ART SANPO

二〇二〇年三月から新型コロナウイルスの影響で人々の移動が制限されたため、アートに関わる「人」にフォーカスしていたプログラムから、「アート作品」を軸にしたプロジェクトへの転換を模索しました。アート作品はどのような状況でも街の中を自由に動けると考え、今治市内の複数の店舗をアート作品が巡回する展覧会「ART SANPO」を二〇二一年から始め、二〇二三年に二回目、二〇二五年に三回目を実施しました。

##### 3. アーティスト・イン・今治(主催:今治市)

日本国内で活動するアーティストを今治市内に招き、地域との交流を進めます。「まちなか」のパブリックスペースにおいて制作活動を行うことで、地域の方々に身近にアートに接する機会を提供しながら、アートの切り口から「まちなか」の賑わいや新たな魅力の創出を図るプロジェクトです。

よくよく



二〇一八 一〇月

[Imabari Landscapes They Saw 2018]  
作家：小川希、和田昌宏、飯川雄大、  
佐塚真啓

[ART SANPO 2023] 展示風景

赤羽史亮 《Morning Dew (study)》(二〇二二)と  
《spore》(二〇二三)を  
sotosu (右)／うお駒(左)にて撮影

二〇二〇 七月

[Imabari Landscapes They Saw 2020]  
作家：小宮太郎、前谷開、石黒健一、  
堤拓也

二〇二二 二月二十八日

[ART SANPO 出張企画@余暇]  
作家：佐塚真啓、キンマキ、永畑智大  
展示場所：今治ホホ木座

4

四月三日、四日

[ART SANPO 出張企画@揺れるノアート]  
作家：佐塚真啓、山本篤、和田昌宏  
展示場所：旧浮雲書店

5

五月～一二月末

[ART SANPO 2021]  
作家：佐塚真啓、キンマキ、永畑智大、  
飯川雄大、村田峰紀、袴田京太郎、  
村山悟郎  
展示場所：onsa' うお駒、sotosu、  
美太' Apony' Osteria erie  
協力：国立奥多摩美術館、onsa'、  
rin art association

二〇二三 一二月

6

[Imabari Landscapes They Saw 2022]  
作家：永畑智大、村田峰紀、村山悟郎、  
下山健太郎

二〇二三 六月～一二月末

[ART SANPO 2023]  
作家：赤羽史亮、岡田理、小宮太郎、  
齋藤雄介、下山健太郎、前谷開、  
横山奈美  
展示場所：onsa' うお駒、sotosu、  
美太' Apony' Osteria erie

7

二〇二四 二月～三月

「アーティスト・イン・今治」  
作家：小宮太郎 主催：今治市  
企画・運営：Imabari Landscapes

8

一〇月

[Imabari Landscapes They Saw 2024]  
作家：赤羽史亮、諫山元貴、  
黒田大スケ、牧寿次郎

9

二〇二五 六月～一二月末

[ART SANPO 2025]  
作家：岡本秀、木村桃子、高橋大輔、  
竹崎和征、竹崎瑞季、手嶋勇氣、  
早川祐太、若林菜穂  
展示場所：オオカミ珈琲、OTTOMANI、  
onsa' sotosu、森、美太'  
協力：ANOMALY、HAGIWARA PROJECTS、  
MISAKO&ROSEN、TAKEJIROZABURO

10

# Imabari Landscapes

## うお駒？



50



51

「アーティスト・イン・今治」  
オープンスタジオの様子  
今治市立中央図書館にて撮影



# Imbar i Landscapes

They Saw 2024

——彼らがみた今治

発行日 二〇二五年七月一日 初版第一刷  
発行者 周山祐未

編集 周山祐未

編集協力 西岡一正

デザイン 牧寿次郎

撮影 赤羽史亮

表紙(上)、P 1、4、15

諫山元貴 表紙(下)、P 2、16、21

黒田大スケ 裏表紙(上)、P 22、31、48

牧寿次郎 裏表紙(下)、P 32、39、52

加藤淳一 P 40(下)、43

問い合わせ・企画・発行

Imbar i Landscapes

imbar i landscapes.com



Instagram @imbar i\_landscapes





# pari capes

Saw

24